

帝都モノガタリ

『大正探索者』

創造指南書』

本書では大正という時代、文化を扱っている為、現代において差別的な表現となるものが含まれていることがあるが、差別の肯定や、助長する意図は決してない。

目次

はじめに	- 3 -
探索者とは	- 3 -
大正の探索者の創造	- 3 -
探索者の性別	- 3 -
探索者の出身地	- 3 -
探索者の身分	- 4 -
大正の探索者の職業	- 4 -
アナーキスト	- 4 -
医者	- 5 -
学生	- 5 -
官僚	- 5 -
教授、教師、範士	- 6 -
軍人、退役軍人	- 6 -
刑事、警察官	- 7 -
芸術家	- 7 -
芸人	- 7 -
高等遊民	- 8 -
女学生	- 8 -
女給	- 9 -
書生	- 9 -
私立探偵	- 9 -
神職、僧侶、陰陽師	- 10 -
新聞記者	- 10 -
大陸浪人	- 11 -
渡世人	- 11 -
特高(特別高等警察)	- 11 -
拾いや	- 12 -

浮浪者	- 12 -
文士	- 13 -
弁士	- 13 -
民俗学者	- 13 -
探索者の装備	- 14 -
参考：外国人の探索者	- 14 -
装備リスト	- 15 -
衣料品	- 15 -
生活費	- 15 -
雑貨類	- 15 -
薬品、医療品	- 15 -
食料品	- 16 -
通信	- 16 -
高級品、嗜好品、贈答品など	- 17 -
交通	- 17 -
娯楽	- 17 -
その他、いろいろ	- 17 -
参考：大正期の物価指数	- 18 -
参考：大正期の市民の生活費割合	- 18 -
大正時代の探索者の現金と資産	- 19 -
武器リスト	- 19 -
参考資料、その他	- 20 -
あとがき	- 20 -
奥付	- 20 -

はじめに

本書は『Call of Cthulhu 新クトゥルフ神話 TRPG』向けである。いわゆる7版だ。

クトゥルフ神話 TRPG のメインの舞台の一つである1920年代の日本、すなわち大正時代の探索者を創造する為のヴァリエーションである。

探索者を作成する基本的なルールは掲載しない。

必要があればルールブック、あるいはクイックスタートの該当箇所を参照すること。

本書において、ルールブックの参照については下記のように記載する。

例)

RB P.70 → ルールブックの70頁を参照。

QS P.10 → クイックスタートの10頁を参照。

なお、クイックスタートは以下から入手可能である。

<http://r-r.arclight.co.jp/wp-content/uploads/2019/12/NewCoC-QS-191220.pdf>

探索者とは

『Call of Cthulhu 新クトゥルフ神話 TRPG』において、プレイヤーは探索者と呼ばれるキャラクターを担当する。

探索者は怪物、謎、そしてクトゥルフ神話の秘密を探し求め、理解し、最後には立ち向かおうとする。(RB P.10、QS P.4 より引用)

探索者は謎や怪物、秘密を探索し、立ち向かう存在だ(そして、多くのシナリオはそのように書かれている)。

探索者がシナリオやその探索に対しての態度や関わり方は自由(当該のセッションにおけるキーパーの協力と他のプレイヤーの同意が得られている範囲では)だが、探索者であることを忘れないようにしよう。

大正の探索者の創造

探索者の基本的な作成手順は、RB P.28、QS P.7 を参照する。

大正時代の探索者であっても、手順自体に変わらない。

探索者の性別

男性でも女性でも問題ない。

しかし、大正時代は明治期に比べれば女性の権利が拡大しているが、現代のような自由は無かった。

明治31(1898)年に戸籍、戸主権の制度が導入され、従来以上に家へ所属が重視されるようになり、女性を束縛するようになった。

大正期は様々な女性はその権利を取り戻させようとしたことは確かである。

ここまで書いたが、『Call of Cthulhu 新クトゥルフ神話 TRPG』はフィクションを取り扱っている。探索者が女性である場合でも、差別、不自由を受ける必要はない(いかなる理由も必要ない)。取り扱う場合は、当該セッションにおける参加者全員の同意を得ることを忘れずに。

探索者の出身地

日本人で国内であれば、特に問題はない。

元々帝都に住んでいたことにするののもよいが、大正14(1925)年の市勢調査では、約192万人と言われる人口の中で生粋の江戸っ子は約10万人、帝都生まれの市民は約68万人と言われており、地方から出て来た者が多いことを示している。

外国人の場合、明治中期までは行動が制限されていたが、内地雑居により大正期では比較的自由(行動の拘束は基本的に受けない)になっている。

ただ、当然多くの帝都市民は外国語が分からず、同様に外国人を珍しがらる。詳細は参考：外国人の探索者 P.-14- を参照。

探索者の身分

明治維新において明治政府は四民平等を謳ったが、新たに皇族、華族、士族、平民の身分を定めた。これは法的な特権は伴わないものだったが、明治17(1884)年に華族令が出されて、華族は特権階級となる。

明治、大正期を通じて国、政府に対して何らかの貢献があった者を新たに華族に叙勲された勲功華族も少なくないが、元から華族の家柄とは異なる一段低いものと見られることもあった。

江戸期より四民の外にあった賤民への差別は根強いものがあり、大正期となっても色濃く残っていた。これを解消する為に、大正11(1922)年に全国水平社が設立された。

探索者の身分は自由だが、職業からそれらしい身分を選んだ方がよいだろう(もちろん、職業と身分が遠い場合のギャップを埋める設定を考えるのも面白い)。

探索者の身分によらずいかなる差別、不自由を強いられるべきではないが、時代の空気を反映する為のフレーバーとして扱うのがよいだろう。

この問題を取り扱う場合、例によって参加者全員の同意を得ること。

大正の探索者の職業

大正時代の職業サンプルを紹介する。RB P.38にあるようにこれは一例に過ぎず、キーパーに相談して新たな職業を作ることも可能だ。

社会的な立場と職業は一致することあるが、不一致の場合も少なくない。職業はテンプレート、探索者の傾向を表す為のものだと思ってよい。

当時、学歴や資格、あるいは性別の問題からその職業に付けない場合がある。しかし、それを絶対とする必要はない。

再度だが『Call of Cthulhu 新クトゥルフ神話TRPG』は、フィクションを取り扱っている。何らかの理由を持って、制限を無視してもよいだろう(厳密な理由ではなく、それっぽい理由でよい)。

例えば、軍人に女性はいない。だが、フィクションではよく見られる様な男装の女性、何らかの理由で性別を偽っている、この時代に設立されたいわゆる特務機関に属している訓練を受けた非正規の軍人等とすればよいのだ。

あるいは、職業のテンプレートとして軍人を選んだだけで、実際の職業は別としてもよい。キーパーとよく相談しよう。

各職業の職業技能欄に、対人関係技能とある場合は、威圧、言いくるめ、説得もしくは魅惑のことである。

アナーキスト

厳密には無政府主義者を指すが、ここでは社会主義者や護憲運動者の過激派などを含めた反社会的な勢力に属し、活発に活動を行っている者の総称とする。

これらの多くは自ら信じる主義主張が何よりも重要であると考えている。多くは非暴力的だが、意思堅固で無慈悲という点では直接的な行動に出る者と変わりはない。

大正においてデモクラシーという平和な時代、成金主義の頹廢的な時代と思われるが、明治末期からの民衆の不満が爆発、様々な騒動や運動が起こった時代である。

明治43(1910)年の幸徳事件(いわゆる大逆事件)以降、社会主義、共産主義者への警戒が強くなり翌44年には特別高等警察(特高)の前身である特別高等課が設置される。

これらの受けて直接的な行動よりも思想的な行動、雑誌発行等によってその思想を世に問う動きが多くなった。

探索者としては相応しくない、動きが取りづらいように見えるが、非合法の方面に通じている、警察関係にある意味特殊なコネがあるようにすると立ち回りやすいだろう(何度も繰り返すが、キーパーと他のプレイヤーの同意が必要である)。

職業技能：隠密、心理学、手さばき、変装、対人関係技能から2つ、任意の他の2つの技能

信用：0～50%

職業技能ポイント：[EDU×2+POW×2]または[EDU×2+APP×2]

医者

江戸期において医者の資格や免許のようなものは基本的に無かった(一部の藩には資格のようなものはあった)。落語『死神』にあるように、自ら名乗ればその日のうちから医者だったのだ。

明治に入って様々な制度改革の一つとして明治5(1872)年の学制で医学校も組み入れられ、7年には医制が公布され、教育研修と臨床経験が必要であることが定められた(それまで医者だったもの実績を考慮して仮免許として営業を続けられた)。

明治9年に医師開業試験が定められたが、明治39年の医師法をうけて大正5(1916)年に廃止され、医師の資格を得るには国指定の大学を卒業するか、医師試験に合格する必要があった。

医者になるのには金が掛かる。探索者が営利目的の医者であろうと、金持ちの道楽で医者をやっているように構わない。

職業技能：医学、応急手当、科学(生物学)、科学(薬学)、ほかの言語(ドイツ語)、対人関係技能から1つ、研究もしくは個人的な専門としての任意の他の2つの技能

信用：30～80%

職業技能ポイント：[EDU×4]

学生

主に大学生となる。

大正期には多くの大学(特に私立大学)が帝都に集まっており、そのため帝都は学生の街でもある。

私立大学は、慶應義塾(慶應義塾大学)、東京専門学校(早稲田大学)等だが、区分としては一応専門学校となっていた。大正12(1923)年の当時は全国に4つの帝国大学(東京帝国大学、京都帝国大学、九州

帝国大学、東北帝国大学)しかなく、他は全て専門学校となっていた。

帝国大学令の第一条に「帝国大学ハ国家ノ須要ニ応スル學術技芸ヲ教授シ……」とあり、第一に設立された東京帝国大学が、官僚養成機関の性格が強かったのは当然だろう。

これらの学生の多くは経時的に余裕がある華族や大店の子息であることが多かった。

後述する書生と学生の区別は難しく、単に他の家に住み込んでいるだけの学生も書生と呼ばれた。

職業技能：図書館、ほかの言語、以下の技能から2つ：運転(自転車)、回避、乗馬、水泳、跳躍、追跡、手さばき、登攀、対人関係技能から2つ、研究もしくは個人的な専門としての任意の他の2つの技能

信用：0～50%

職業技能ポイント：[EDU×4]

官僚

官僚とは役人と同じ言葉だが、ここでは特に高級官僚、あるいはその高級官僚の下に付く、国家の指導層として、高等文官試験制度により選ばれた役人のことを指す。

この時代、多くが帝国大学出身者であり、今で言ういわゆる「キャリア」だ。

大正期は、外務、内務、大蔵、陸軍、海軍、司法、文部、農林、商工、逓信、鉄道省が存在していた(逓信省とは、郵便、通信関連と海上輸送に関する事務管理を行う省である)。

探索者としては動かしにくいように思えるが、ある程度裁量の利く立場であれば適当な理由付けで現場から離れることも可能であり、動機の面でも「御国の為」という立派なものから「自身に面倒が振りかからないように」という積極的な消極さまで出来る。

職業技能：経理、心理学、図書館、対人関係技能から2つ、任意の2つの技能

信用：30～80%

職業技能ポイント：[EDU×2+INT×2]または[EDU×2+APP×2]

教授、教師、範士

主に大学、高等学校、専門学校で教えるも立場の者が教授と呼ばれたが、様々な教育者をまとめて扱う。

大正期では教授、教師などの教育者の立場にある者達は、エリートだった。

多くが何らかの大学、それに類するものを出、さらにはやはり同じく教育機関にてさらなる研究や、あるいは後進の育成にあたっている。

この時代は中・高等学校機関の普及に力を入れており、多数の教師が必要とされていた時代だ。教員を育成する目的の師範学校が全国に設立され、大正9(1920)年には94校にも及んでいる。

師範学校は小学校の教師を、高等師範学校は中学校の教師を育成した(この辺りの制度や、そもそもの学校の分類等が複雑の為、大体である)。

この師範学校は一般には授業料を徴収しないことになっていた。卒業後は教師にならなければならなかったが、卒業証書の有効期間が7年であった(その後も、試験を受けるか、学力優等、授業熟練、品行端正な者は終身有効とした)。

職業技能：心理学、図書館、ほかの言語、対人関係技能から1つ、研究または個人的な専門として任意の4つの技能

信用：20～70%

職業技能ポイント：[EDU×4]

軍人、退役軍人

明治3(1870)年に発令された徴兵規則、同5年の『全国徴兵の詔』、同6年の『徴兵令』によって、建前上、全国民の成人男子(満20歳)には軍役が義務づけられた。

徴兵令も猶予、例外が多数存在しており、兵役に行くことが無い男子も少なくない(兵役検査に合格しても直ちに入営ということではなく、必要人員に

足りていれば予備役として招集待ちになることもあった)。

職業軍人となるには16歳で海軍兵学校か、陸軍士官学校に入る必要がある。陸軍の場合には、12歳で陸軍幼年学校に入ることも出来た。この場合、最終試験に合格すれば20歳までには少尉として任官する事になる(士官学校に入れる人間にはある程度の権力なり、金力なりが必要とされる。士官として任官されるのは、それなりの身分がある者達だ)。

兵役検査は本籍地で行われる為、検査の為に田舎に帰るなどもあった。特に田舎では兵役検査での甲種合格は一種の名誉なものと見なされた。

明治期では軍人はエリートだったが、大正期になりデモ鎮圧に駆り出されたり、あるいは不祥事、軍縮のあおりで収入、民衆人気共に目減りした。

退役軍人は文字通り何らかの理由で軍を退いた者で、職業軍人だった者で、兵役から帰ってきたものとは別とする。

男性の探索者が兵役の経験を経験しているとすれば、銃器の取り扱いに長けていたり、場合によっては<砲>の技能を持っていてもおかしくはない。

・士官の場合

職業技能：近接戦闘、経理、サバイバル、射撃、心理学、ナビゲート、対人関係技能から1つ、任意の1つの技能

信用：20～70%

職業技能ポイント：[EDU×2+STR×2]または[EDU×2+DEX×2]

・兵士の場合

職業技能：隠密、近接戦闘、サバイバル、射撃、水泳または登攀、任意の3つの技能

信用：9～30%

職業技能ポイント：[EDU×2+STR×2]または[EDU×2+DEX×2]

刑事、警察官

明治新以降、それまで新政府に所属する各藩の兵士が治安維持に当たっていたが、明治4(1871)年に警察組織が組織され、主に士族からなる邏卒(明治5年に巡査と改称)が行うようになった。

その構成員はほとんどが元軍人、軍関係者、それも2/3程度が薩摩藩の関係者だったという。

首都警察として警視庁は明治7年に設置されている。

彼らは最初1m程度の棍棒を標準装備としており、制服を着た捕り方のようなものだったが、明治15年に西南戦争でも活躍した抜刀隊を意識してか、警察内でも士気を高める為に帯刀を許可、一般警察官はサーベルを標準装備とした(らしいが、サーベルは私物であった。制服の方は支給品だ)。

大正13(1924)年から特高を中心に拳銃の装備が始まり、警視庁でもFN/ブローニングM1910、コルトポケット.32(M1903)などが400挺ほど採用された。これ合わせて地方の警察でも予算に合わせて購入したようだ。

大正初期の頃までの警察官と言えば尊大な態度で市民に「おいおい」「こら」と声を掛けるのが当たり前だったが、大正2年、安楽総監の就任時に各署の所長に対して「もしもし」と呼びかけるように改善せよとの通達が出ている。

これ以降、警察の不祥事や市民との衝突による警察官の不人気が進み、その態度も丁寧なものになっていった。

・警察官(巡査)の場合

職業技能：応急手当、近接戦闘、法律、目星、威圧または説得、任意の3つの技能

信用：0～30%

職業技能ポイント：[EDU×2+STR×2]または[EDU×2+DEX×2]

・刑事の場合

職業技能：聞き耳、近接戦闘、射撃、心理学、法律、目星、対人関係技能から1つ、任意の1つの技能

信用：20～50%

職業技能ポイント：[EDU×2+STR×2]または[EDU×2+DEX×2]

芸術家

芸術家と総称するが、様々な創作、創造、表現に関わる者の総称とする。

大正時代に限ったことではないが、支援者、いわゆるパトロンを捕まえて支援を得ている者から、自身の作品を売って生計を立てている者まで様々だ。

それぞれの分野において技術を学ぶ場合、半ば徒弟制のような師匠と弟子の関係性は継続的だったが、明治20(1887)年には東京美術学校(通称、美校)が設置され芸術家の養成を行うようになった。初期の頃は伝統芸術の復活を掲げていたが、次第に西洋美術等も取り入れていき、大正時代の美校には、日本画、西洋画、図案(工芸、建築)、彫刻、金工、鋳造、漆工、図画師範、写真の科目があった。

明治末期には文部省美術展覧会(通称、文展)が始まり、大正期には様々な展覧会が催されるようになり、作品の発表の場が増えたが、同時に派閥争いを生み出すことになった(表面化した、とも言える)。

大正期は文明開化後に入ってきた様々な外国の影響とそれに対する揺り返し、対抗、迎合が見られた。中には独自の道を切り開く者が多く現れ、後にも先にもない芸術を生み出した。

職業技能：芸術/製作(任意の分野)、自然または歴史、心理学、目星、対人関係技能から2つ、任意の2つの技能

信用：9～50%

職業技能ポイント：[EDU×2+DEX×2]

芸能人

広義における芸能人、なんらかの芸能を職業とする人々だ。

明治、大正期に様々な娯楽、芸能が輸入されたり、新たに生み出されたり、変化を遂げた。

なかでも帝都の浅草は江戸期は官許の興行街であったが、明治期でも浅草観音や、公園に指定されて再び興行街を形成した。

いわゆる浅草六区が有名だが、浅草公園でも大道芸、見世物が演じられており、様々な芸能、浪花節、泰樹節、娘義太夫、猿芝居、居合い抜き、女相撲。砂絵、玉乗り、かつぼれ、ちょぼくれ、瞽女等々、伝統的なものからそこから派生したもの、全く新しいものと幅が広がった。

明治末期から活動写真、大正初期からオペラが流行した。オペラは震災前後に下火となったが、活動写真は変わらず隆盛を見た。初期の活動写真は輸入されたものだったが、早い時期に国産のものも作られるようになり、大正期にはすでに活動写真を撮影する会社も作られており、俳優、女優の養成所のようなものまであった。

当時サイレントだった活動写真は、活動弁士という独特な芸人を生み出した。また、上映に合わせて演奏をするオーケストラなども設置されていた。

職業技能：聞き耳、芸術、心理学、変装、対人関係技能から2つ、任意の2つの技能

信用：0～80%

職業技能ポイント：[EDU×2+APP×2]

高等遊民

高等な教育を受けたものの特にそれらを生かすわけでもない者を言う場合もあるが、ここでは経済的に余裕があり、働く必要のない高雅な趣味を持つ者たちを指す。いわゆるディレッタントである。

華族階級のものが多いが、明治-大正を通して新たに叙勲されたもの、いわゆる勲功華族や、大戦景気などで莫大な富を得たいわゆる成金の類まで様々である。

一般にない外国の知識を持っていたり、伝統や文化、芸術に精通するものや、自ら切り開いていく者もあり、世間の流行をリードしていた。

職業技能：芸術、ほかの言語、対人関係技能から2つ、任意の4つの技能

信用：50～99%

職業技能ポイント：[EDU×2+APP×2]

女学生

いわゆる「はいからさん」。海老茶色の袴が大流行した時期には「海老茶式部」とも。

高等女学校、女子師範学校の生徒の事で、帝都では明治7(1874)年に神田に出来た女子師範学校(後の東京女子師範学校、現在のお茶の水女子大学)が有名で良家の子女が多く通っていた。

最初期の頃は女子専門学校はほとんど帝都にしかなかった。

実際問題、女子専門学校を作っていたのは在野の文化人、知識人であり、政府側には女子に高等教育を授けると虚栄心が助長されるだけとか、妊娠のめったも盛んな二十一、二歳という結婚期を三年もおくらせ、民族の繁栄に悪い影響があるということが、まじめに主張されていた。

家政学科などのいわゆる女性的な学科ばかりではなく、通常の専門学校と変わらない専門教育を行っているところも少なくなかったが、そういった科目が皆無という学校も無かった。

大正中期までは袴姿の女学生が多かったが、後期になると洋装や、制服(セーラー服など)を取り入れる学校も多くなっている。

余談だが、いわゆるお嬢様言葉は「てよだわ言葉」等と呼ばれ、女学生を中心とした新しい(?)言葉であった(現代での女子高生の言葉に近い感覚である)。

職業技能：図書館、対人関係技能から2つ、研究もしくは個人的な専門として任意の1つの技能または運転(自転車)、任意の4つの技能

信用：30～50%

職業技能ポイント：[EDU×2+APP×2]

女給

明治 30(1897)年代の始め頃からビアホール、カフェ、ミルクホール、レストランと次々と外食産業が発達、流行した。

最初の頃は、給仕婦と呼ばれていたが、後には特にカフェなどの従業員などを女給と呼ぶようになる。

今で言うウェイトレスである女給達は、外食産業の花形だった。

洋装の女給も少なくはなかったが、高級をひけらかしたように思われ、多くは和服に大きなエプロンという姿だった。

この女給の多くはなんと無給であり、そのうえ店側に手間賃のようなものを取られることも少なくなかった。彼女らは客からのチップなどが主な収入となっていた。

震災前は美人の女給を揃えて給仕をさせる程度だったが、震災後になると関西方面から進出した店が客の隣に座って酌をしたり、さらにそれ以上のサービスをさせることが流行し、キャバレー化が進んだ。この結果、昭和 8(1933)年は特殊喫茶（風俗営業）として警察の管轄化に置かれることになる。

職業技能：聞き耳、心理学、目星、言いくるめまたは魅惑、任意の 4 つの技能

信用：10～50%

職業技能ポイント：[EDU×2+APP×2]

書生

文士(作家)や学者、政治家、教師等の自宅に住み込み師事する弟子達の事である。あるいは単に弟子として養ってもらい(単に住み込んでいるだけの場合もある)、学業に励む若者(特に男性)を指す総称でもある。

書生達は大学などの高等教育機関の代わりに、師事する人物に専門の教育を受けていた。

当然、単にごろごろしているごろつきの様な不良書生から、師事する人物のために(本業である勉強をそっちのけで)日夜奔走する書生など様々だ。

書生を家に入れていることで、家主はそれを養えるだけの収入や、地位があるのだと誇示できた(もちろん、学生を育てることは御国の役に立つことだと考える家主も居る)。

ある意味、学生よりも融通が利き、学生以上に自由な身分と言える。

探索者は師事する人物を設定して、思想、行動への影響を考えるとよいだろう。

職業技能：近接戦闘、図書館、対人関係技能から 2 つ、研究もしくは個人的な専門として任意の 2 つの技能、任意の 2 つの技能

信用：0～30%

職業技能ポイント：[EDU×4]または[EDU×2+STR×2]

私立探偵

大正時代の日本では、探偵小説の流行(主に海外のもの翻訳、翻案もので、国産のものは昭和期になる)により、『探偵』という言葉自体が広がった。

日本の探偵業は特にライセンスが必要なく、自由業である。恐ろしいことに近年、平成 19(2007)までそういったものは無かった(これ自体も資格が必要になるなどではなく、開業の届出が必要になっただけである)。

明治中期から調査を行う会社、いわゆる興信所が多く設立された(現在までも続く帝国データバンクの前身帝国興信所は明治 33 年設立である)。

これらの興信所は企業の信用調査が目的であったが、日露戦争後の大戦景気に沸くとにわかに企業の調査ブームが訪れて探偵社が多数設立された。

私立探偵はご多分に漏れず、警察が関与しないような事件や状況に関して活動を行い、依頼人を選ばないことが多い(それこそフィクションの中の悪徳探偵のように、調査結果をもって依頼人や調査対象を恐喝したり、自ら犯罪を起こしてそれを解決する者なども居た)。

私立探偵の中には過去に警察で働いていたか、あるいは何らかのコネを警察に持っている者が多く、それを有効に生かして仕事をしている。

当時は銃、剣の携帯、所持は許可制であったため、かなりの重武装の探偵も望める(それこそ『小説に登場する探偵のような』活躍が出来る)。

職業技能：鍵開け、心理学、図書館、変装、対人関係技能から2つ、射撃または近接戦闘、任意の1つの技能

信用：9～30%

職業技能ポイント：[EDU×2+STR×2]または[EDU×2+DEX×2]

神職、僧侶、陰陽師

『神道』の神職、『仏教』の僧侶、そして日本古来の『陰陽道』の陰陽師で、日本の宗教家であり、オカルティスト達である。

その大半は伝統に則って、単なる儀式や祭祀、行事を執り行う、単に形式的なものだが、希に実際の霊的パワーを持ち、本物の法力や、式神を操るものも存在したかもしれない。

明治元(1868)年の神仏分離令や、それ以前の江戸期から続く国粋神道の流れから『国家神道』が復活し、『廃仏毀釈』が起こり、仏像、寺が多く破壊された時期があったが、明治後期の頃には落ち着きを見せ、相変わらずの神社と寺院が共存するようになる。

陰陽師は明治期で多くが迷信である言われ、陰陽師達は悲運の運命を辿った。特に明治維新に際して、その頭領である土御門晴雄が没するや、中央官庁に暦を作成する事業を吸い上げられ、内部的にはその土御門の家系の存続も危うくなるという事態に陥っている。

明治43(1911)年のハレー彗星の接近事件(彗星の事を陰陽道では長星と呼び、世の不吉の現れであり、これの接近を防ぐ祈祷が行われた)、明治天皇崩御に際しては、その御病平癒の加持祈祷に効果が無か

ったことなどから、陰陽師達は歴史の表舞台から消えていった。

残念ながら、探索者としてこれらの職業にあっても霊的なパワーは得られないが、クトゥルフ神話の呪文をそれっぽくアレンジして使っていることにしてもよいかもしれない。

職業技能：オカルトまたは伝承(宗派の専門)、聞き耳、心理学、図書館、歴史、対人関係技能から2つ、任意の1つの技能

信用：9～60%

職業技能ポイント：[EDU×4]または[EDU×2+APP×2]

新聞記者

ネット、TVはもちろん、ラジオも震災後に普及した大正時代は、新聞がマスメディアの中心であり、最大のものだった。

新聞記者は、当時花形の職業である。

日本最初の日刊新聞は、明治3(1870)年に横浜で創刊された『横浜毎日新聞』であると言われている。横浜や長崎などの外国人居留地には内外の情報が集まりやすい為か、あるいは外国文化が直接流れ込んでくる為か、いち早く新聞が作られている。

以降、様々な新聞が創刊されるが、帝都での最初の新聞は、明治5年の『東京日日新聞』となる。その後も続々と新しい新聞が創刊されていく。

新聞の普及にともない、それに乗せる広告なども広まるようになり、明治20年代から30年代にかけて、広告代理店が発展した。

探索者は新聞社に所属する記者でもよいし、フリーでもよい。また、新聞記者そのものではなく、新聞や雑誌に記事を買ってもらうようなジャーナリストや、出版に近いしい者でもよいだろう。

職業技能：芸術/製作(写真術)、心理学、図書館、歴史、対人関係技能から1つ、母国語、任意の2つの技能

信用：9～30%

職業技能ポイント：[EDU×4]

大陸浪人

主に満州浪人を指しているが、満州以外にも多数いた為、大陸浪人と呼ばれる(支那を中心に、蒙古、朝鮮のあたりまで含んでも問題ない)。

大陸に渡った日本人で、そこへ住居、あるいは放浪した男達(男に限らず、シベリアお菊や、満州お菊のように有名な女も居た)で、主に「馬賊」として名を馳せた。

馬賊というと盗賊の様に思われるが(実際、それと変らない者の多く居たことには違いないが)、治安の悪い支那各地(特に満州地方)の自衛組織の中でも、馬を駆る部隊を特に馬賊と呼んでいた。

彼らの中には元士族や、あるいは何らかの理由で日本に居られなくなった者もいた(この両方に当てはまるのが有名な伊達順之助である)が、単に「夢と浪漫」を求めて大陸に渡った者も少なくない(もちろん、中には大それた野望を持った者、ただ単に放浪したかった者、あるいは政府の密命を帯びた者等も居ただろう)。

昭和 6(1931)年の満州事変以降、支那全土に抗日の嵐が吹き荒れることになるが(それ以前からもひどい状況だった)、これにより体制側に付く馬賊、抗日運動に参加する馬賊に分かれる。特に体制側に反抗した馬賊はわざわざ「匪賊」と呼んだ。

本土からはこの大陸浪人とはかなり浪漫ちっくな存在として受け止められており、様々に小説化されている(主に武俠小説で)。なかでも特に有名なものに「馬賊の唄」(池田芙蓉、大正 14 年に雑誌『日本少年』に連載)がある。

職業技能：威圧、近接戦闘、隠密、サバイバル、射撃、乗馬、対人関係技能から 1 つ、任意の 1 つの技能

信用：0～30%

職業技能ポイント：[EDU×2+STR×2]または[EDU×2+DEX×2]または[EDU×2+APP×2]

渡世人

いわゆる、やくざ、博徒、無宿人である。

無宿人とは江戸期において定住する場所を持たず、都市部においても権力の保護外にある放浪者で、主に博打を打って日々の糧(を得るための金)を得ていたため、無宿人=博徒といった構図となっていた。

この無宿人は、江戸期にはいわゆる「仁義の世界」で厳しい仕来りどと相互扶助の精神を持った、いわゆる侠客が多くいたが、大正時代に多くは組織化、やくざ化しており、もはや「仁義の世界」ではなく「仁義なき戦いの世界」だったようだ。

大正期においても博打は非合法であり、官憲に見つかれば当然捕縛の対象となる(賭場を開帳する側が官憲と繋がっており、申し訳程度の捜査を行う程度の場合もある)。

やくざは大方、博徒と的屋に別れる。

博徒は文字通りの博打打だが、的屋は縁日などで露店を出したり、その呼び込みを行ったり、大道芸的な芸を見せて商品を売ったりする商人に近い。

職業技能：威圧、言いくるめ、隠密、近接戦闘、経理、心理学、任意の 2 つの技能

信用：0～60%

職業技能ポイント：[EDU×2+STR×2]または[EDU×2+POW×2]

特高(特別高等警察)

明治政府成立時から存在する高等警察を母体として、明治 43(1910)年の幸徳事件(いわゆる大逆事件)を契機に設置された特別高等警察、略して特高警察、特高である。

体制批判に限らず、共産主義、反政府主義、その他、思想、宗教、政府に都合が悪いあらゆるものを摘発、弾圧する組織だ。

最初は東京、大阪、京都などの主要 9 府県にしか設置されなかったが、大正 14(1925)年の治安維持法を受けて全国に設置された。

その捜査手法は苛烈、過激を極め、拷問なども当然のように行われた。また、逮捕された本人のみではなく、その家族や周辺人物にまで弾圧は及び、特

高に睨まれると社会的に抹殺されるも同然、ともいう状態だったと言われる。

密告を推奨しているのか、独自の情報網を持っており市井の噂にまで精通していた。

探索者には不向きに思えるが、手段はともかくとして治安や、正義を守る存在であることは確かだ。また、特高であることを隠していることにするのもしよいだろう。

ルール上、特高としての特権は存在しない。特高だからと言って脅迫、逮捕したり、拷問したりが許されるわけではない。あくまでフレイバーとして扱い、実際は技能ロールをさせるべきだ。

職業技能：隠密、聞き耳、心理学、追跡、変装、目星、対人関係技能から1つ、任意の1つの技能

信用：20～60%

職業技能ポイント：[EDU×4]または[EDU×2+STR×2]または[EDU×2+DEX×2]

拾いや

広義では「屑拾い」と同じになっているが、ここでは特にゴミではない使えそうなものを拾って生計を立てる職業のことを指す。

平たくすると浮浪者の一部ということになるが、その中でも特に朝の早い時間などに歓楽街を歩いて、前の夜のうちに落とされたものを拾い集め、拾得する者だ。

屑拾いと同じようだが、彼らは独自の拾うものを決めているか、センスを持っており、ただの屑拾いとは違うと本人らはしていたようだ。

浮浪者達が組織立てられて厳密な縄張りのようなものを持っていたように、拾うものが決められていたのかもしれない。

職業技能：隠密、手さばき、ナビゲート、目星、対人関係技能から2つ、任意の2つの技能

信用：0～15%

職業技能ポイント：[EDU×2+DEX×2]

浮浪者

帝都は様々な人間を飲み込んだ。

現代と同じく、帝都東京に憧れる人々は多く、帝都に出ればなんとかなると何の伝手も無いような人々が夢と希望を持って列車に乗り込んだ。

そういった人々の中に成功し、名を成した者が居たことも確かだが、それはごく一部でありほとんどは労働者階級として吸収されるか、郷里へ帰っていった。

だが、そこからも漏れた人々は浮浪者となった。

浮浪者の大半は野宿だったが、中には10銭の木賃宿に泊まる人々、日雇いの労働者達の、定住する家を持たない人々もこの浮浪者に含まれている。

大戦景気から大正9(1920)年頃までは景気が良かったこともあり、あまり浮浪者は見られなかったが、大戦景気の悪化とさらには震災によって浅草の浮浪者の数は増加した(昭和に入ってからさらに増加の一途をたどる)。

この浮浪者の多くは地方から上京した者の落伍し、帰郷する金も無い者達だったが、中には学歴もあり、家柄もあるようなものが浮浪者となっているものもある(有名な文学者の中にはわざわざこの浮浪者を体験したり、あるいは浮浪者であった者がいた)。

一見無秩序に見える浮浪者達も一種の組合、ギルドのようなものを作っていることが有り、稼ぎの分配などに厳しい規則と序列があったとも言われている。

また、この浮浪者の中には感染症や、当時は感染症と信じられていた病気に罹っている者達が家を追い出され、やむなく浮浪者をしている場合もあった。

職業技能：隠密、聞き耳、サバイバル、手さばき、近接戦闘(格闘)または投擲、対人関係技能から1つ、任意の2つの技能

信用：0～15%

職業技能ポイント：[EDU×2+STR×2]または[EDU×2+DEX×2]

文士

文士とは文筆によって生計を立てる者の中で特に小説を書くものを指す。

帝都には学校が多く設立された。その為に学生向けの出版が急増し、また視野を広げようとする学生たちの要請にもしたがって様々なジャンルの本が売れるようになる。

大正期は一種の出版ブームであり今でも続くような出版社が設立されている(講談社は明治 44(1911)年、小学館は大正 11(1922)年、岩波書店は大正 2 年、ちなみに角川は戦後昭和 20(1945)年、集英社も昭和 24(1949)年)。

明治末期から大正、昭和初期には数多くの雑誌が創刊され、様々な文章が掲載された。

そういった背景に加えて、明治末期から大正期は大衆の娯楽が大幅に増加した時期で、この娯楽の一つに小説があった。

震災前後から大衆小説、大正末期の探偵小説ブームが起こり、暗い世相の中に気軽な娯楽としての小説が広がった言えよう。

職業技能：オカルトまたは自然または伝承(専門の分野)、芸術/製作(文学)、図書館、歴史、母国語、ほかの言語、対人関係技能から 1 つ、任意の 1 つの技能

信用：9～50%

職業技能ポイント：[EDU×4]

弁士

弁士と言うと、ただ単純に弁舌の立つ人間を指す言葉だが、大正期に、あるいはそれ以前から演説全般(特に政治家活動に於いて)を行う人間を言うようになった。

軍談、講談、講釈を行う講釈師、その中でも活動写真に解説を付ける活動弁士等、様々な分野において弁士と呼ばれる職業がある。

これらの話す芸能は、同じような分野との交流が進み、ハリセン(張扇)に代表されるような様々な芸がもたらされた。

大正期の活動弁士には、落語や講談のように合いの手を入れるファンが付くほど人気を博した者がいた。無声映画に解説を付ける活動弁士は、明治末期、活動写真の登場から現れ、大正期には活動写真の隆盛に合わせて激増し、震災後、昭和に入ってトーカーが現れてからは激減した。

これらの活動弁士が紙芝居などの芸能(?)に流れて、あの独特の調子が受け継がれていくのである。

職業技能：オカルトまたは伝承(専門のジャンル)、言いくるめ、隠密、聞き耳、芸術/製作(弁舌)、歴史、対人関係技能から 1 つ、任意の 1 つの技能

信用：9～30%

職業技能ポイント：[EDU×2+APP×2]

民俗学者

民俗学とは、その土地に基づく風習、信仰、伝承などを研究する学問である。

最終的には分類し、思考様式を明らかにすることにあるが、明治時代以降の、民俗学の太祖ともされる柳田國男によれば、それは民族の生活を向上させるのが目的だと言っている。

民俗学者の多くはフィールドワークを中心に、直の聞き取り調査、記録観察を自ら行うことがほとんどで、一般的な学問の様に座して研究するものではなかった。

明治～昭和初期にかけて民俗学は黎明期とも言える混沌とした時期だったが、柳田國男、折口信夫等の有名な民俗学者が出ている。特に柳田國男を中心に民俗学を研究するグループ(より古風に一門と言った方が良いかもしれない)が生まれ、様々な功績を残している。

また、民俗学ではないが考現学を提唱し、日常生活を研究した今和次郎もこの人である。

職業技能：聞き耳、心理学、人類学、図書館、歴史、目星、対人関係技能から1つ、任意の1つの技能

信用：9～50

職業技能ポイント：[EDU×4]

探索者の装備

探索者の装備については、RB P.401 から始まる装備リストと本書付属の武器リスト P.-19 -を参照する。銃器の類は、おおまかだが口径とリボルバー/オートが近いものをそれ相当として扱う(こだわりがある向きはキーパーに相談し、データを自作しよう)。

大正の探索者の武器や、銃器類の扱いはだが、明治初期の廃刀令以降、刀剣や銃器の類を大っぴらに持ち歩くことは憚られたが、取り上げられたりした訳では無かった。

銃器の類は明治 43(1910)年の銃砲火薬類取締法まで廃刀令準拠で、一般人でも普通に所持可能だ(要するに、持ち歩かなければ問題ない)。新聞などにも堂々と銃火器の類の広告が載るほどだった。

それも通常の火薬の拳銃の類だけでなく、空気銃や杖銃(いわゆる仕込み銃)、猟銃の類からダイナマイトまで買えると広告には謳っていた。

明治初期から銃火器は国産品が存在したが、多くは軍部へ入り、その払い下げという形で一般には出回った。だが、国産品に比べ輸入品の方が入手が楽で、安価であったこともあり、輸入業を営む商店や、銃火器の専門店もあった。

銃砲火薬類取締法の施行後は、銃火器の所持は登録、許可制となり、基本的には軍人、警察官といった正統な理由が無ければ所持できなくなった(当時、軍人や警察官が所持している拳銃の類は私物であり、個人の所有物だった)。

大雑把な所持資格として、満 20 歳以上、所持証明書を持っている、の 2 点となる(所持証明書は正規の取り扱いの訓練を受けていることが条件)。

予備役や、兵役を終えた後の在郷軍人会に所属している場合や、治安が悪い地域、外国へ行くなど言えば簡単に許可が降りた。

ある程度の身分証明も必要だが、私立探偵が護身の為に銃を所持していたり、田舎や満州などに行く新聞記者などが銃器を所持してもおかしくなかったようである。

同法の施行と同時に取り上げられた訳でもないで、それまでに所持していた銃器の類はそのままであったようだ。

参考：外国人の探索者

政府側が諸外国との面倒を避ける為、名目上は治安や風俗維持の為、外国人を一つの土地にまとめて住居させる外国人居留地を、主に江戸期に開港した港の周辺に定めた。

この為、基本的に夜間に居留地外を出歩くことは禁止され、また旅行等の長距離の移動も制限されていた(が、多くの外国人が役人等の公人か、政府に関係のある商社等の人間であった為、厳しい制限ではなかったようだ)。

明治 32(1899)年、内地雑居の実施により居留地の法律は廃止され、居留地の外に住むことや、旅行の制限も解除された。

ただ、それまでも外国人の住居はその範囲に限られたが、昼間出歩く分には何の制限も無かった為、帝都で外国人を見るのはそれほど珍しいものではなかったようだ。

装備リスト

RB P.396 からのリストのように、大正時代の様々な値段を提示する。これらの値段は参考であり、相場によって変動する為、キーパーは適切に変更することが出来る。

これらのリストは大正 10 年前後のものを基本的に掲載する。

現代に馴染みの無い単位の換算は以下の通り。

1 円=100 銭、1 円=1000 厘、1 銭=10 厘

1 匁=3.75g、1 斤=600g、1 升=1.8L

衣料品

注染本染浴衣 1 反(大正 14 年)	70 銭~80 銭
学生服 1 着	50 銭
学帽(大正 5 年)	3 円~4 円
呉服銘仙類	10 円前後
背広注文服	30 円
注文ワイシャツ	1 円 70 銭
貸衣装(黒の留袖)	3 円
桐下駄	1 円
足袋	88 銭
地下足袋(大正 12 年)	1 円 5 銭
長靴(大正 13 年)	4 円
蛇の目傘(大正 12 年)	1 円 25 銭~1 円 50 銭
扇子	15 銭

生活費

銭湯入浴料	6 銭
ガス料金	8 銭
水道料金	70 銭
下宿料金(大正 7 年) 3 食付き 1 室	15 円
長屋、借家家賃(大正 8 年)	9 円 50 銭
大工手間賃	2 円 10 銭
畳表の裏返し手間賃 1 畳	56 銭

雑貨類

地図(5 万分の 1 図)	13 銭
鉛筆 1 本	5 厘
万年筆(大正 7 年)	1 円 80 銭~2 円 50 銭
インク(書記用万年筆)(大正 15 年)	30 銭
絵の具(児童向け 12 色)	90 銭
半紙 1 帖	3 銭
名刺 100 枚(大正 9 年)	60 銭
粉歯磨	小袋 3 銭
大袋 10 銭	
化粧石鹸 1 個	15 銭
おしろい 1 個(30~50g)	30 銭~40 銭
ポマード 小缶(大正 11 年)	30 銭
懐中電灯(昭和 5 年)	35 銭
裁ち鋏(大正 7 年)	2 円
ローソク 1 箱(40 本入り)	80 銭
マッチ 1 包(10 本入り)(大正 3 年)	3 銭
蚊取り線香(10 巻き入り)	20 銭
菜切り包丁(大正 8 年)	80 銭
桐箆筒	8 円
炭(大正 9 年、1 俵(約 15k))	1 円 58 銭
目覚まし時計	2 円 90 銭
自転車	45 円~60 円
中央公論(総合雑誌)	~大正 4 年 20 銭 ~大正 7 年 30 銭 ~大正 8 年 40 銭 ~大正 10 年 60 銭 大正 11~ 80 銭

薬品、医療品

太田胃散 小缶	30 銭
傷薬(メンソレータム) 小缶	25 銭
朝鮮人参 1 斤(大正 8 年)	7 円 80 銭
目薬(大学目薬) 1 瓶	10 銭
入院料金(都内平均) 日額	最高 8 円 最低 2 円 50 銭

食料品

米 1 升(大正 8 年)	一等米 60 銭 二等米 50 銭 三等米 48 銭
馬鈴薯 1 升	30 銭
大根 1 本	8 銭
玉葱 100 匁	7 銭
豚肉ロース 100 匁	66 銭
牛肉ロース 100 匁	1 円 20 銭
鶏一羽	3 円 60 銭
めだひ 1 切	15 銭
鯖(さわら) 1 切	17 銭
鰯(あじ) 1 尾	8 銭
塩 1 斤(大正 9 年)	5 銭 6 厘
砂糖白 1 斤	34 銭
醤油 1 升(大正 9 年)	84 銭
味噌 100 匁	9 銭
味醂 1 合	19 銭
味の素(大正 8 年) 1 瓶	1 円 77 銭
豆腐 1 丁	4 銭
小豆 1 升	35 銭
小麦粉 1 升	33 銭
食パン 1 斤(大正 7 年)	14 銭
缶詰(牛肉大和煮) 1 缶	26 銭
缶詰(鮭水煮)(大正 5 年) 1 缶	7 銭
茶(中級) 100g(大正 8 年)	煎茶 23 銭 3 厘 番茶 11 銭 6 厘
鶏卵 1 個	6 銭 5 厘
酒 1 升	上等酒(特級) 2 円 50 銭 中級酒(1 級) 1 円 70 銭 並等酒(2 級) 1 円 20 銭
ビール	大瓶 39 銭 ジョッキ一杯 18 銭(大正 7 年)
もりそば 1 枚	10 銭前後
カレーライス 1 杯	7 銭~10 銭
天どん 1 杯	30 銭
うな重(並) 1 人前(大正 4 年)	40 銭
江戸前寿司(並) 1 人前	15 銭

あんぱん・ジャムパン 1 個	2 銭 5 厘
たい焼き 1 尾	1 銭
大福 1 個(大正 11 年)	2 銭
最中 1 個	1 銭(3 口 2 銭)
汁粉	12 銭
コーヒー 1 杯	10 銭
ラムネ(大正 6 年) 1 瓶	5~6 銭
アイスクリーム(資生堂パーラー) 1 個	20 銭
キャラメル(森永製菓)	10 粒入り 5 銭 20 粒入り 10 銭
カステラ(大正 5 年) 1 個	40 銭
牛乳 配達用 1 瓶	8 銭~10 銭
カルピス 1 瓶(大正 8 年)	1 円 60 銭
駅売りのお茶 1 瓶(大正 9 年)	7 銭
駅弁(幕の内) 1 個(大正 8 年)	20 銭

通信

電報料金(大正 9 年)	市内(15 字以内) 15 銭 内地相互間(15 字以内) 30 銭
電話料金(大正 9 年)	40 円
公衆電話料金	5 銭(1 通話 5 分以内、大正 13 年に 1 通話 3 分以内に改定)
郵便料金(大正 11 年の改定より)	印刷物 4 銭 はがき 8 銭 書状 20 銭
外国郵便料金(大正 11 年の改定前)	はがき 4 銭 書状 10 銭
外国郵便料金(大正 11 年の改定より) ※大正 14 年にさらに改定され、11 年の改訂前に戻る	はがき 8 銭 書状 20 銭
新聞購読料(朝日新聞月極)	1 円 20 銭
案内広告料(3 行、朝日新聞)	2 円
ラジオ放送受信料 1 ヶ月(大正 15 年)	1 円

高級品、嗜好品、贈答品など

菓子類折詰	2 円前後
葡萄酒(紅白セット)	2 円～5 円
広辞林(大正 7 年)	3 円 20 銭
英和辞典(大正 11 年)	2 円
百科辞典 全 26 巻(昭和 9 年)	104 円
オルガン(大正 9 年)	45 円～750 円
ピアノ(大正 9 年)	1400 円～3500 円
ハーモニカ(昭和 2 年)	1 円 50 銭
レコード(大正 9 年)	1 円 80 銭
和文タイプライター	240 円
ゴールデンバット(たばこ)(大正 8 年)	7 銭
鉄道時計(大正 7 年)	25 円
金 1g	1 円 36 銭

交通

人力車 上野公園から (大正 3 年)	浅草公園、本郷大学前 20 銭 日本橋 30 銭 日比谷公園二重橋、京橋 40 銭 新橋駅 45 銭 小石川植物園 35 銭 赤坂見附、芝浦 60 銭 四谷見附 55 銭 亀戸天神社 50 銭
タクシー料金	最初の 1 哩 50 銭 以降、0.5 哩毎に 10 銭
円タク ※大正 15 年から	市内均一 1 円
鉄道旅客料金	上野-青森 7 円 23 銭 新橋-大阪 6 円 4 銭 手宮-札幌 55 銭 門司-熊本 2 円 70 銭
山手線旅客料金	5 銭
私鉄旅客料金	北千住-西新井 5 銭 北千住-久喜 43 銭
市バス乗車賃(円太郎)	10 銭(大正 13 年) 7 銭(大正 14 年)
水上バス運賃 (大正 9 年、浅草-両国)	5 銭
都電乗車賃(大正 9 年)	7 銭
国鉄定期券 最低区間 1 ヶ月	通勤 1 円 40 銭 通学 1 円 5 銭

地下鉄料金(浅草-上野間) ※昭和 2 年より営業運転開始	10 銭
航空旅客運賃(東京-大阪間)(週 1 往復) ※大正 13 年より朝日新聞社、東西定期 航空会が旅客運輸を開始	35 円
ガソリン 1 リットル	39 銭

娯楽

相撲入場料(大正 9 年)	2 円 80 銭
歌舞伎座	7 円 80 銭
映画入場料	30 銭
上野動物園入場料(大正 11 年)	大人 10 銭 子供 5 銭
博物館観覧料(大正 11 年)	大人 10 銭 子供 5 銭
ゴルフ(非会員)	1 円
馬券(単勝式) ※複勝は昭和 6 年から	5 円、10 円、20 円

その他、いろいろ

理髪料金(大人)	40 銭
クリーニング料金	背広上下 1 円 5 銭 ワイシャツ 12 銭
大卒初任給	50 円
銀行初任給	50 円
巡査初任給(大正 9 年)	45 円
小学校教員初任給(大正 9 年)	40 円～55 円
公務員初任給(大正 7 年)	70 円
国会議員の報酬(年額)	3000 円
日雇い労働者の賃金	1 日 1 円 99 銭
大学の受験料	10 円
大学の授業料 年額 (実習費などを含まない)	100 円
東京大学の授業料 年額 (実習費などを含まない)	～大正 10 年 50 円 ～大正 13 年 75 円 大正 14 年～ 100 円
都立高校の授業料 年額	54 円
幼稚園の保育料 年額(大正 11 年)	33 円
写真撮影料(6×9 センチ)(大正 7 年)	60～1 円 50 銭
戸籍謄本、抄本の発行手数料	15 銭

帝国ホテル宿泊料金(大正 12 年)	一人部屋 8 円 二人部屋 14 円
遊女揚げ代(大正 5 年)	3 円

参考：大正期の物価指数

明治 33(1900)年を 100 とした物価指数の動向を示す。物価にダイレクトに反映されるものではないが、当時の世相と合わせて参考になるだろう。

年次	帝都の物価	主要 13 都市の物価
明治 33(1900)年	100	100
明治 38(1905)年	122.3	120
明治 43(1910)年	130.4	162.3
明治 44 年	137.9	133.2
大正元(明治 45)年	149.4	144
大正 2 年	151.7	145.2
大正 3 年	136	132.9
大正 4 年	129	124.5
大正 5 年	153.9	144.6
大正 6 年	203.9	196.7
大正 7 年	281.4	279.2
大正 8 年	338.2	329.8
大正 9(1920)年	358.2	333.7
大正 10 年	287	274.5
大正 11 年	277.1	272.8
大正 12 年	286.1	275.9
大正 13 年	305.2	289.4
大正 14 年	294.3	293.2
大正 15(昭和元)年	263.5	259.1
昭和 2 年	255.7	242
昭和 3 年	247.3	242
昭和 4 年	241.2	223

参考：大正期の市民の生活費割合

一般的な労働階級の家計である。

大正 5(1916)年、世帯人員 3.9 人のデータとなる。

	円.銭	%
収入総額	28.51	100

所帯主収入	23.52	82.5
妻収入	2.26	7.9
子弟収入	2.15	7.5
その他収入	0.58	2
支出総額	27.88	100
飲食費	11.55	41.4
飲食費内訳		
米	5.23	
魚	1.07	
肉(卵、牛乳を含む)	0.48	
野菜	1.31	
光熱費	1.71	6.1
被服費	2.09	7.5
保険費	2.28	8.2
育児費(学校費を含む)	0.92	3.3
交通費(電車賃車代等)	0.7	2.5
通信費	0.13	0.5
交際費(贈品、来客費)	0.88	3.1
享楽費(新聞、娯楽費)	0.36	1.3
その他雑費	0.91	3.3
負債費	1.45	5.2

大正時代の探索者の現金と資産

RB P.44 にある現金と資産を大正の探索者向けのものを示す。

生活水準については RB P.43、QS P.12 にある表と同一である。宿泊設備や旅行については適宜大正時代のものと置き換えること。

〈信用〉の値	現金	資産	支出レベル
無一文(0 以下)	50 銭	なし	50 銭
貧乏(1~9)	〈信用〉 × 1 円	〈信用〉 × 10 円	2 円
平均(10~49)	〈信用〉 × 2 円	〈信用〉 × 10 円	10 円
裕福(50~89)	〈信用〉 × 5 円	〈信用〉 × 10 円	50 円
富豪(90~98)	〈信用〉 × 20 円	〈信用〉 × 10 円	250 円
大富豪(99)	10 万円	1000 万円+	5000 円

武器リスト

基本的な武器については、RB P.401 からの武器表に従う。

ここでは大正時代や、日本独特の武器について紹介する。

武器名	技能	ダメージ	基本 射程	1 ラウンド の攻撃回 数	装弾数	価格	故障 ナンバー
匕首	<近接戦闘(格闘)>	1D4+DB	タッチ	1	—	5 円	—
仕込み杖	<近接戦闘(格闘)>	1D6+DB	タッチ	1	—	20 円	—
日本刀	<近接戦闘(刀剣)>	1D8+DB	タッチ	1	—	時価	—
脇差	<近接戦闘(刀剣)>	1D6+DB	タッチ	1	—	時価	—
竹刀	<近接戦闘(刀剣)>	1D3+DB	タッチ	1	—	1 円	—
木刀	<近接戦闘(刀剣)>	1D6+DB	タッチ	1	—	5 円	—
薙刀	<近接戦闘(薙刀)>	1D8+DB	タッチ	1	—	時価	—
二十六年式拳銃(9 mm)	<射撃(拳銃)>	1D10	15m	2	6	22 円	100
十四年式自動拳銃(8 mm)	<射撃(拳銃)>	1D10	15m	3	8	40 円	100
南部式自動小型拳銃(7 mm)	<射撃(拳銃)>	1D6	15m	3	6	32 円	99
モーゼルミリタリー(7.63 mm)	<射撃(拳銃)>	1D8	15m	3	6/10/20	65 円	98
和弓	<射撃(弓)>	1D8+1/2DB	60m	1/2	1	50 円	95
火縄銃	<射撃(火縄銃)>		50m	1/3	1	100 円	95

※仕込み杖は刀剣が仕込んであるのではなく、杖の芯に鉄などを使用して打撃力を上げたもの。

※十四年式拳銃は名前の通り、大正 14 年に開発された拳銃(日本軍の装備は大体が皇紀だが、何故か大正)。

※火縄銃は大正期に入っても依然として猟師等が使用していた。弾丸や黒色火薬も入手可能だった。

参考資料、その他

本書で主に参照した資料等を記載する。

- 新クトゥルフ神話 TRPG 株式会社 KADOKAWA
- クトゥルフ神話 TRPG クトゥルフと帝国 株式会社 KADOKAWA
- 日本生活文化史 9 市民的生活の展開 河出書房新社、和歌森太郎（編集委員代表）
- 明治・大正 庶民生活史 日本図書センター
- 明治大正東京散歩 人文社
- 値段史年表 明治大正昭和 朝日新聞社、週刊朝日編
- 物価の文化史事典 展望社、森永卓郎監修

- 『大正略字』フォント

表紙に使用している『大正略字』フォントは以下の URL よりダウンロード可能。

<https://booth.pm/ja/items/363104> ※フリーなのでぜひ、ご活用を！

- モーゼルミリタリーの値段について、紳士なヤマさん様より指摘を受け修正しております(不明→65 円)。
- 帝都モノガタリ

<http://fgate.cyber-ninja.jp/index.html>

あとがき

再び、いつもと異なる形式で実験的にお送りしています。ご意見、ご感想をお待ちしております。

『新クトゥルフ神話 TRPG』も発売されて 1 年以上が経過しましたが、現代日本以外はカバーされていない状態が続いている為、本書の作成に至りました。

基本は Web で公開している『帝都モノガタリ』の 7 版コンバートとなりますが、適宜、改訂を進めています。

『新クトゥルフ神話 TRPG』でも大正帝都でも探索をお楽しみください。

奥付

発行日：テスト刷り 令和 3 年 3 月 20 日

初版発行 令和 3 年 3 月 27 日

2 版発行 令和 3 年 3 月 27 日

発 行：F.G./龍門亭 EDO-RAM(@EDO_RAMv200)